

あしふ

95号10 1971



る

P T A 改革の戦略・戦術

東京都 矢崎好子

「ああいう人たちは言葉の使い方が少し違うんですよ。」と私はいいました。「まあ大げさというか、冗談がすぎるといいうかそんなところがあるんで、陰謀だとか情報収集とかいっても、それほど深刻な意味はないと思いますよ。」

「そうでしょうかしら。」

Kさんは心配そうでしたが、私なんかも結婚早々、主人の友達連におどかされたことがありました。私たちは主人の親の家の敷地内へ、十五坪ばかりの家を立てたのですが、そのとき主人の友達が、「なんだ貴様、グラクシヤがって、犬になりやがって、今に絞首刑にしてやるぞ！」

違う世界からきた私には、こんないい方はあまりいい気持ではありませんでした。絞首刑だなんて、冗談にもほどがあろうではないか、十五坪の家を建てて絞首刑にされなきゃならないんだったら、世の中生きてる人はなくなってしまう。と、むつとした記憶があります。しかしあとと、彼らの雰囲気のみ込めてきてからは、あれはつまり「いいうちを建てたね、おめでどう。」という意味だったのだと納得がいきました。もつともこの人たちも、世の中の水になじむに従って、言動がよくいえばおだやか、悪くいえば月並になってきて、この絞首刑云々といった人は、今は某国立大の先生ですが、そのお嬢さんが有理子さんという名前、「やっぱりこのお名前は、造反有理から

おとりになったのでしょうか？」と尋ねたところ、大あわてで、「イヤイヤイヤ、とんでもない、そんなことありません。」仲間うちでは、「あいつは奥さんの造反をいちばんおそれているんだ。」という話で、専門の御研究では成果もあげていらっしゃるのでしょうか、いささか元気がなくなつたように見受けられます。こういうわけで、S・K氏の言葉づかいは、私にはなつかしいというか、着なれた着物を着るような、一種の安心感を与えたのです。

帰り途、私は皆にむかい、「あしたは私とKさんと二人で口説きに行きますよ。どうせ夜になるでしょうし、皆さん毎晩でほしいへんでしょうか。」

これは皆の前ではいえないこと……Tさんとの抗争や、これまでのごたごたを打ちあけて、S・K氏ひっぱり出しのきめ手にしようと思つたからです。主婦としては、夜の七時・八時の外出は辛いところ、渡りに舟と乗ってくれて、私とKさんが行くことにきまりました。

帰るなり私は今別れたばかりのKさんに電話をかけ、「あなたご存知？ ああLさんという人、Tさんと親しいんだそうですね。彼女の前では気をつけてものをいわなくちゃならないわ。」

「まあ、そういえばおかしなあと思いましたのよ。四年生は私の隣で互選していたのですけれど、みないやや、いややいうてきまらんようでした。そこへあの人がおくれたきたわけ。そしたらみなが、ア、Lさん、もうあなたにしよう、あなたにきめたわ。いうて、さっさと帰り支度なんか始めて、まあえらい

ひどいことをするなあと思うて見ていましたら、Lさんはけろりとして、そうか、わたしになったんか、いうて文句一ついわんときまってしまっただんですの。おかしな人やなあと思いましたが、そういうわけだったのネ……。」

と、たちまちTさんのまわし者と思い込んだようす。私もその話をきけば、Lさんが自分の意志で出たものとか思えませんが、こりやたいへんだ、今日のことはTさんにつつ抜けに相違ない。サア妨害にあわねばいいがと心配はひとかたならず。しかしKさんやU先生の話を書けば、一たん会長になってくれと持ち込んだ以上、たとえば会長や校長が反対をとなえたからといって、取り消すことなどできそうもないらしいので、とにかくS・K氏に持ち込んだが勝ち、承知させさえすればこっちのものだと、明日の晩が待たれてなりませんでした。

約束どおりS・K氏は待っていてくれて、私たちからくわしい話をきき、それにKさんは非常に持って行き方が上手で、しまいには「運営委員会には若い美しいお母さん方もいらっしやいますから。」などと男なら共産黨員でも心を動かさそうな（ホントは彼らは女の容色などを問題にしてはならないのではありません）ことをいって誘惑したものですから、どうやら八分どおり承知しそうな形勢となりました。その日はそこまで引き上げ、さらに翌日、先生もご一しよにふたたび全員で押しかけたところ、S・K氏、「来年からは下の子もおせわになることだし、今こわつてもどうせいつかは持ち込まれそうな感じだから、悪いことは早くすましてしまおうという意味で、承知しましょう。」とあざやかな返答。そこでKさん、

「まことにありがとうございます。お札の申し上げようもございません。つきましては、これから女性副会長を探すわけで、どなたかご希望のお方はございませんか。」

S・K氏「イヤべつに、心当りありません。」

Kさん「なにかご注文はございませんか。」

S・K氏「そうですね……できたら昭和生まれの人で……なるべく美人を……。」

Kさんは仕返しを食って、返事のしようもなく笑うばかりでした。

私は天にもものぼる心地でしたが、これから男性副会長一名、女性副会長一名を指名しなくてはなりません。この二人がS・K氏の足をひっぱるようではまずいから、まだ安心はできない。私の手持ちの札は、男性副会長に某国立大の講師で、自治会の役員などしたことのある人、奥さんは高校の先生で、例の学童保育の運動のとき間接にです知り合った。子どもは女の子で、しばしば私の家へ遊びに来ていました。「お父さんは北海道へ出張よ。」などというので、「お父さまは大学でなにを教えていらっしやるの。」ときいても「知らない。」という。しかし理科系の人がらしく思われました。この人のことは問い合わせれば分る手だてがありましたし、その大学は反体制派のすこぶる多いところですから、まずS・K氏とはいいコンビではないかと思われました。さらに女性副会長には例のDさん、これはもう本命だ、彼女が何をしたかはくわしくは知らないし、この際そんなことを根掘り葉掘り聞いてまわることは危険でできないけれども、Nさんから、「うまく行かなかつたんでもうPTAに

は出て来なくなった。」ときただけでいいの察しはつきま
す。さらにこの人は例の「PTA いたい放題」の座談会に出
席しており、その速記録が残っている。それを調べてみると、
地区や学級で、小人数の集会をひんばんにやって欲しい、PT
A はそこから始まるという意味の発言をしています。まことに
けっこう、東京の○大学の法科の出身というのもよろしい。現
在審議会にH氏という法律専門家がいますが、運営委員会にもそ
ういう人は欲しいところです。

こういう戦略をたてて指名委員会にのぞんだ私は、そうそう
柳の下にドジョウはいないことを、知らされねばなりませんで
した。

まず六年生の指名委員が、「Tさんという方はもう一年任期
がおりなのでしよう。ですから、そこへ持っていつてわるい
ことはありませんね。」といい出しました。私とKさんはじつに
困った。というのはどんなことがあったってTさんの再任は妨
げたいのに、ここでその理由をいうことはできない、Lさんが
いるからです。Kさんしかたなく、

「今まで女性副会長は、皆さん一年だけで、再任なすつた例
はありませんのよ。」

六年の委員「でも再任はしてもよろしいわけでしょう？」

私はエエ、もうTさんにいいつけられてもかまわない、ど
うせ仇同志なんだと覚悟をきめて、

「わる口はいいたくありませんが、Tさんでは私は手を焼き
ました。」

と、卒直にいえば彼女がうそつきで、しかもそのうそがかな

り意識的・戦術的であり、皆をけむにまいて自分の考えを通そ
うとするやり口をあげ、

「とてもじゃないけどくたびれる相手で、あんな人と一しよ
に規約改正なんてとんでもありません。」

と訴えますと、Kさんも「私だってずいぶん煮え湯を飲まざ
れましたのよ。」と、Tさん排斥の態度を明らかにしたものです
から、皆々、「そんなことは知りませんでした。それならも
う、話になりませんね。」と、Lさんまで同調してみせます。

ようようTさんの再任は防いだものの、今度は男性副会長で
私の出した人は問題にもならない。年が若すぎる、会長同様大
学の先生なのはよくないなどと、賛成する人が一人もないのだ
からどうにもなりません。U先生は、現副会長のR氏を、学校
側としては推しますとおっしゃる。止むを得ず私はまた憎まれ
役を引き受けて、R氏とは一年間つきあつたし、彼は私の味方
になってくれて、いいにくいことを会長にいつてくれたことも
あり、義理と人情からはどうも出しかねる言葉だけれども、こ
の人は非常に口下手で、彼のいおうとする意味をつかむことが
容易でない。長時間話をきいてもどうしても要領を得ないこと
が多く、自分でも不安心なためだろうが、長電話をかけてきて、
それも尋常一様の長電話じゃない。一時間はザラ、二時間やら
れたことさえある。仕方がなく彼じやないかと思われるときは、
子どもに受話器をとらせ、居留守を使ったことも再三ありまし
た。善良な人で考え方も悪くないと思うが、あれでは他の役員
に迷惑がかかる。運営委員は軒なみ被害にあつてははずですと
いいますと、Kさんも笑い出して、「じつは私も……。」と、事

実を証明してくれましたので、そんな奇癖の持ち主ではダメだと、ようやく引つ込ませることができました。学校側だって彼の人物が分らないはずはない。ヌケヌケ推薦するとは、無責任きわまる。無責任でなければP T Aを骨抜きにしようとする悪質な陰謀です。それをようやく切り抜けたのに、女性副会長のDさんもこれまたまずいことになりました。意外に評判の悪い人で、「むつかしいことばかりいう。」「しよむない話など前ではできない人。」「皆がついていかない。」「などと蹴られてしまい、私も直接知らないだけに反論もできません。まあここは引つ込んでおいて、おそらく簡単に引き受ける人はないであろうから、最後の切札にしてやろう。従って女性副会長探しには、私は積極的に動かないでいようと思いました。

議論の末、男性副会長はスポーツ用品店の御主人で、N・Cさんという人にしぼられてきたのですが、私も賛成したというのは、この人の奥さんが審議会の委員で、私と一しよに仕事をしている。温和で無口な人ですが、たまたま口をきけばきわめて筋の通ったことをいい、頭のいい人であることがわかります。私の考えでは、夫婦は互いに影響もしあうし、最初からあまり程度の違う相手とは結婚しないから、円満な関係であれば夫を見れば妻がわかり、妻を見れば夫がわかる。(もつともうちの亭主がこれをきいたら、迷惑至極だというでしょうが) N・C夫人を見れば、N・C氏はある程度信用できると思つたわけです。その上この人は青少年対策協議会という、教育委員会社会教育課の育成団体、実情はまあ有名無実のしろものですが、その役員なので、社会運動に関心があるようだし、その青対協を

P T Aと連動させることによって、双方の質的向上もはかれるのではないかといい、欲張つた考えを皆が持つたのです。いよいよ例の如く押しかけて、お願ひしますを連呼してみますと、迷惑がらはしたものの、絶望という感じではありません。サアどうやってもう一押しするかと相談の末、Kさんは青対協の会長のところへ、彼を口説いて欲しいと頼みに行つたのです。私はS・K氏のとときあんまりシャジャリ出て、少々皆の反感を買つたという感じがしたので、子どもが小さいのにかこつけて、なるべく必要のない時には手を出さないことにし、この時も同行しませんでした。Kさんの電話では大成功で、会長はN・C氏をくどいてくれることになつたそうでした。

ところがその翌朝、Kさんがまた電話をかけてきて、「まああなた、昨夜Tさんが電話してきましたん。そのいうことが、『Kさん、あなたほどの方が、ずいぶんとんでもないことをなさるのね。指名委員会というのはごく秘密のもので、内部での話を外に洩らすなんて、してはならないことですよ。それを青対協の会長のところへ、候補者の名前をあげて相談にいくなんて、いったいどういうことですか。』なんて、もう私くやしくてくやしくて、ごはんもおいしくありません。」

「へえー！ どこからそんな話をきいたと思ひます？ やっぱりこれはLさんよ。」

「そうでしょうねえ。ほかに考えられませんもの。」

しかしよく考えてみるとLさん以外にも洩れそうな筋はあるので、Tさんにごく親しい人が、やはり審議会の委員になつて

いるのですが、この人の御主人が青対協の役員だということを

私は知っていました。Lさんでなければ、青対協の会長がこの人に洩らし、そこからTさんに伝わったのだらう。Kさんもなるほどというわけで、あんまりLさんを疑うのはよくない、しかし彼女には用心するに如かずという結論になりました。

「とにかくKさん、会長とTさんがなにをたくらんてるか知らないが、こつちとしてはちゃんと筋は通せますよ。なにしろ現規約では指名委員はどういう方法で候補者を探せともきめられていないんですから、それは私たちの自由なんで、秘密にしなければならぬとしたら、むしろTさんみたいな外部からの圧力を排除するという意味ですよ。この上とやかくいってきたら、私がひらき直ってやるし、こと次第ではいきさつを広報で暴露してやりますから。」

「私はこれから校長・教頭先生にこのことをお話して、もし面先生がTさん側につかれるようなら、辞任しようと思います。」
「それもけっこうでしょう。総辞職してやろうじゃありませんか。もう一べん指名委員を選出しないおすとして、その理由を学校側がどう説明するか、ききものですよ。」

と、いうわけで、Kさんが校長室へとんでいって話をすると、面先生とお腹の中はどうか知りませんが、「そんなことは気にしないのでほしい。他の社会教育団体などと、連絡をとりあつて候補者を探すことは、ほうぼうのPTAでやっていることで少しもさしつかえありません。」というご返辞。

その日の指名委員会で、この事件をKさんと私がこもこも報告しますと、みなみなTさんのやり口に反発して、反体制の結束を固くすることができたのですから、何がさいわいになるか

わかりません。

間もなくN・C氏を口説き落すことにも成功して、最後の女性副会長探しに入りましたが、これが予想外にむつかしく、皆副会長になんかなるは大災難だと思っているので、一週間ねばつてついに断われたり、門前払いをくわされたり、どうも思わしくない。私はこの間、積極的な行動をとらず、ひたすらDさん持ち出しの時期をねらっていました。たまたまDさんが編集したという「PTAのしおり」を手に入れて、読んでみたところ、それにはPTAとはかくあるべきだということなどが整然と書いてある。いかにも整然としているのが気になつてしまいました。そこでKさんに電話をかけ、

「私、実はDさんに持ち込みたいと思っていたんですけど、この「しおり」を読んで考えてしまった。PTAとはこういうものだ、教育基本法とはこういうものだというようなことが並べてあるが、その原則と、現実とのかかわりあいが必要だから、ような気がする。もちろん原則をかけることは必要だから、まずそれをやったのだといわれればそれまでだけれども、においとしてはどうも、原則はこうなんです、皆さんこのとおりのやりにさい、そうすれば現実はよくなりますといった、単純な理想主義があるように思われる。いまや現実はまったくとんでもない混乱で、こういうやり方ではどうにもならないと、私なんかは思うのだけれど、いかがでしょう。」

と話すと、Kさんは、
「こういうことをいわれても、ついて行ける人は少数ですから……。」

別の面からDさんの現実遊離をとなえたので、まことに惜しい人ではあるが、執着するほどのこともあるまいという気になつてしまいました。

Dさんが欠けては私としてもねらいのつけどころもないありさまで、指名委員一同あつちへ行きこつちへ行き、二月二十日の期限がせまってもきまらないには閉口しました。ある時などどとび込んでみたら相手は五十を過ぎたと思われる女性で、私は話をしてるうちに「なるべく昭和生まれの美人を……。」といったらS・K氏の顔がうかび、この人を連れていったらアツと驚くだろうとおかしくてたまらず、「ちよつとお電話を拝借」と部屋を出て、電話のところであつたとしたら、そこにも人がいて笑えず、あわててお手洗いにとび込み、ようよう笑つたというばかりかた一幕もありましたが、とうとうKさんが「じつは私の切り札はこの人、今まで出さなかつたのは恨まれるのがイヤで……。」と、I・Mさんといういかにも温和・誠実といった感じの人をつかまえてくれて、私もこの人ならと胸をなでおろし、ようやく指名を終わりました。

こののち警戒していた会長側の反撃もなく、新役員候補は三月末の総会で、めでたく承認され、私としては春とともに心の中にも花の開く嬉しき、委員長W氏、新会長S・K氏、副会長二人の間を、連絡係を買つて出て、歩きまわりはじめました。しかしながら、進歩的な会長をつかまえてくることによつてPTAがよくなると思つていたわけではありません。それは名君さえ出れば、封建制度のもとでも善政が行われ、人民は幸福であり得るといふのと同じで、民主化にむかう正しい路線とい

うことはできません。S・K氏には会長として、会長の権限をよわめる役割を期待したいわけです。

— 続 —

短歌

大阪市 篠原千代

その一、

稜線の影を落して岩の間の

蒼き流れの迫りてあふる

夜の峠越しゆく道の細りつつ

やがて開けぬ湖の灯またたき

村一つ底に沈めて湖は光る

塗新しきポート干されて

その二、

照りかける一重まぶたに恐れつつ

若き嫁の日姑は今亡く

叱られしこともなく過ぐ嫁の日の

明治の人の忍耐ありて

吾が名呼ぶ姑の声は耳朶にあり

夏台風の響の中に

私の戦争体験記

—— 幼児の記憶 ——

鹿児島市 平山博子

昭和二十年、私は四才、当時私は母と二才の弟と三人で長崎市の思案橋に近い寺町（お寺の多い所なのでそう呼ばれていた）の一角に借家住いをしていた。現在私の子供が四才と二才、ウルトラマンに熱中して遊んでいるが、二十数年たって今のことなんかあまりに平和すぎて何も覚えていてくれないのではないのかしらと思う。私の四才から五才にかけてのかすかで、そして強烈な記憶、それは断片的ではあるが、やはり戦争体験になるだろう。

近所の遊び先で空襲警報のサイレンにおびえ、そのうちの人々と暗い地下室におしこめられ母が迎えに来るまで不安だったこと、港へ行く途中、県庁に近い坂の上で、大きな爆弾の音を近くにきき走って引返したこと、お寺の境内を通りぬけお墓のたちならぶ急な坂道を登った所にある町内の防空壕に避難する途中すぐ真上を飛行機がとぶ。「かあちゃん、ほらきたよ、危いよ」と叫びながら私は墓石の陰にうづくまる。「あれは敵機じゃないよ」とのんびり登ってくる母にほっとしたこと、あるときはよそ様の広いお墓を拝借して蚊帳をはり、星と交差する探照灯を見上げながら夜を過ごしたこと、朝早く列を作って配給品をもらいに行ったり、中に虫が入っていてもおいしかったビスケット、赤や白のこんべいとうのお菓子がめずらしく嬉

しかったこと、あわごはんがどうしても好きになれず食べれなかったこと——目をとじると淡く思い出されるのです。夜寝る時は、暗やみでも一人で早く身仕度が出来るように、まくらもとに下着を上にして順々に並べてたたむこと、防空頭巾は所定の柱のくぎにいつもかけておくようにと母にしつけられたこと……。我が家の下には小川をはさんで小学校があった。私は一人よくその校庭で遊んでいた。ある時空襲があった。低空からダダッダ——と爆撃がありそばの倉庫の壁にもぐりこんでいた。私は夢中で校舎の中にかげこみ、近くの教室にもぐりこんでいた。二階で授業を受けていた児童達も一階の教室になだれこむようにして避難してきた。そこまでは私も覚えていたが、あとになって母のはなしによると、母が私をさがして教室にきた時、私は大きな子供達の中で白い小さなハンカチを頭にちよこんとかぶり机の下にうずくまっていたとの事、頭巾の代りにハンカチで身を守ろうとしていた四才の姿に思わずまわりの人と笑い合ったと云う。戦時中、私はもの心ついたばかりだったし、いつも母のふところを守られていたし、その後も家族の戦死の悲しみ、苦労を経験していかないものだから私自身、戦争による傷や苦しみ、真実の戦争の姿については何も知らないのと同じである。母は当時をしのび云う。防空壕の中での農家の人がおにぎりを持ってきて食べているのを見て、どうしても我慢出来ず一つ盗み私達姉弟に食べさせたこと、白いごはんを腹いっぱい食べさせてくれるならどんな辛い重労働でも畑仕事でもするのにと農家の人を羨ましく思ったと。

昭和二十年八月九日、広島について長崎に原爆が投下された

日、その日長崎の空は青くまぶしく晴れていた。母は私に留守番をさせ弟をおぶって近くの郵便局に行こうとしていて校舎のわきを歩いていった。私は縁側からそれを見送り、手をふっていた。その時、爆音をきき、機体をみつけた。こわい予感がした。私は叫んだ「かあちゃん、B29よ、早く帰って」

そして柱の自分の頭巾を何度か飛び上って取ろうとしたが、あわてていたのかとることが出来ない。そのまま急いで押入れの下段にもぐりこんだ。そのとたん、ものすごい音がして家がゆれ茶ダンスが倒れ柱が折れ土や岩がおいかぶさってきた。目の前に梅干しが一ところろげてきた。母は上から落ちてくる校舎の壁やガラスのかげらを全身にあびながら背の弟を胸の中に抱きかえうずくまったという。しかし、奇跡的にも私達三人は怪我もなく、それから手を取り合い、路上に根もとから倒れた木々や家、そして人をもとびこえ夢中で山の上の防空壕にたどりついたのです。その山の防空壕からわずか3〜4キロ離れた浦上方面では一瞬のうちに多くの本当に多くの人々がこがれ死んで、手足をもぎとられ、水を求めてはいずりまわっていたことも知らず、私達は湿った土の上にごぞをしき恐怖の中にも一息ついていった。すると白衣をきた女の人が抱きかかえられるようにして一人の全身大やけどの男の人が入ってきた。皮がむけ肉がちぢれ、はみだし血がしたりおちていて、何ともいえないむかつく異様な臭気が鼻をついた。私共の敷物に休ませてくれと女の人が頼んだ。私のそばにその男の人が横になった。そのただれたむつとする肉と血の臭いはそのあと数年位も私の中にこびりついていてなか／＼とりさることが出来なかった。

私の戦争についての記憶はこれだけである。もっとむごい悲しい体験をもつ人に対して申し訳ないみたいなの私の記憶である。書いていながら私の幼い頃の感傷的な思い出話だけになりそうで、途中で書くのをやめようかと思ったりもした。戦争について書くということがむづかしいものだと痛感した。私は被爆特別手帳を持っている。年に一度検診を受けているが今のところ異状は認められないし、これからにも不安は持っていない。しかしつい最近被爆者の母親から生れた少年が、長い闘病生活のせいもなく原爆症で亡くなられた記事や、そして長崎、広島ではまだ／＼多くの被爆者が苦しんでいることを思うとき、私達親子は同じ長崎市にいながら運が良かったと感謝しながらも、日常は生活に追われ忘れてるのである。

終戦後、私達は父のいた五島に帰った。

その時の食卓のまぜごはんを私が七杯もおかわりして食べたということはそのあといつまでも笑い話にされた。又、父が香りのいい何ともいえないおいしい飲物をのませてくれたが、その香りとおいしさが大人になるまで忘れられず、今思うと紅茶だったのだろうが、あれほどの味にまさる紅茶は今もって飲んだことがない。

又、その当時は、髪に肌着にしらみが多く、すきぐしで髪をすいてもらいブツ／＼とつめてつぶしていたものだった。

それから数年後、私が小学校五年生の時、私と母は長崎へ行く機会を得た。その頃、原爆で奥様を亡くされ御自分も被爆され死を待つばかりの長大医学部の永井隆博士の「この子を残し

て」という著書がベストセラーになり、「長崎の鐘」という映画や歌が流行していた。母は五島からお米といくらかの見舞品をつめたおおきな袋をさげ私をともない、もちろん一面識もない先生を訪ねたのである。

原爆中心地の廃虚の松山町から二十分、まだ戦火のくすぶりが残っているようながれきの山道、草ぼう／＼の原っぱをかきわけ登り、今にもゆうれいロボットが出てきそうな山里小学校の傾いた破れ校舎を見上げながら先生の家へたどりついた。家といってもマツチ箱みたいな小さな小屋に永井先生は丸ぼうずで白衣を着て、あおむけに寝ていらっしやった。

腹のあたりが大きくふくらみ、寝たままで、本を読んだり書かれたり出来るように板が工夫され、横の壁には本がたくさん並び他に坐る場所はなかった。先生は丸顔で少しふとついていたような気がするし柔和な方だった。

ちようど二人のお子様は留守で会えなかったけれど、見知らぬ私達の訪問とおみやげを大変喜ばれ、帰りに記念にと白い台紙に墨で細い字で「めし」ということばともう一つ何か俳句を書いて贈って下さった。その色紙を母は大切にしていたが、福江市の大火の際、我家も全焼してしまいその貴重な形見の品が失くなってしまったことは、つくづく残念に思っている。

現在、その山里の町は、長崎市の住宅街として発展し昔のおもかげはなく、あちこちの家には花や樹木が美しく育ちピアノの音が流れている。原爆中心地を記す塔のある公園も、桜の季節は花見客で、飲んだり踊ったりで大にぎわい、平和記念像のある平和公園も観光客でにぎわっている。

永井博士の病室も今は如己堂といって保存され、時折、観光バスが一時停車し、車中でガイドがちよつと説明して通りすぎ、静かである。

今日十月二十一日は国際反戦デーで、東京のデモの様子がテレビに映っている。

沖繩国会も波乱を含んで論戦の幕をあけた。私は二日ばかりで急いでこの文を書きあげ、ただぼんやりしている。

『ある青春』(1)

大阪市 篠原 広 祐

津堂健治が県立A中学(旧制)に入学したのは昭和十二年四月で、同期生の中に秀才Nが居た。

Nは蒲柳の質で、運動神経は鈍いが、いかにも勉学の虫といった少年で教科はすべて抜群だった。中学四・五年生を対象にした校内実力テストでは五番をくだらなかつたろう。

気取もなく、温厚なNの性格に惹かれ乍ら、しかも健治は彼と親友になりたくないある、反発を抱いたのはNの父が、健治の父同様に帝国大学(現東京大学)出身者であり、彼の頭脳なら親の歩いた学歴を容易に追えそうであるのに、自分はとでも心許ない、裏返せば劣等感がそうさせたのかも知れぬ。

不肖の息子である健治が中学四年を了え、五年に進級した春(昭和十六年四月)Nの姿はもう校内で見られはしなかった。

一高文科に合格、Nが、父（高等裁判官）の跡をつぐべくすんなりと、一高から東大法学部へのコースを進むと知ると、健治は唇をかみ、医師である父に背いて外語校受験を志したのは、Nに対する羨望と反感が作用していよう。しかし本人が語学系上級校を目指そうと意識したのは、中学三年生の頃で理由は全く単純である。つまり理数課目が不得手で、英語に多少の自信があるというだけの事なのだが、その頃（昭和十五年）政局は近衛文麿の枢府議長辞任をきっかけとする新党運動の勃興、既成政党の崩壊、帝国主義的政治待望の風潮をバックに第二次近衛内閣の成立と大政翼賛会の発足、日独伊三国同盟の結成等々、世情は騒然、事件、トラブルがあいついでいた。

が、十五才の少年には、そうした複雑な情勢などを把握出来るものではない。

只、生活必需品が切符制になり、修学旅行が野外教練に肩替りしたりして、学校生活が潤いのないものになってゆくのは切実だった。

昭和十六年になると東條陸相の「戦陣訓」を暗誦させられ、小学校が国民学校と替り、各学校は学校報・国団の体制を布かれ、秋十月には『大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件』が公布。これにより、昭和十七年三月卒業年度学生の卒業修了は三ヶ月短縮され、十六年の十二月となったが、此が第一回繰上卒業で卒業と同時に徴兵検査が実施された。而も軍の国政に関する圧力は、この頃頂点に達する。東條英機が陸相兼任の総理大臣となり十二月八日には大太平洋戦争に突入、言論・出版・集会・結社等に強い取締法が適用される。

当時の背景について記述すると際限ないので、折にふれて引きたす事にし、Nのその後を辿ってみよう。

四修で見事一高生の栄冠をにない、旧制高校の自由な寮生活を謳歌出来た筈の彼が、昭和十八年には学生の徴兵猶予停止にあい、この年の十二月一日学徒出陣している。

昭和十六年四月、第一高等学校文科入学

昭和十八年九月、繰上卒業後東京帝国大学法学部入学

全年十二月一日、学徒出陣により大阪第廿三師団入隊

昭和廿二年春、大陸野戦病院で戦病死、当時の階級は陸軍歩兵少尉……………。

二年五ヶ月の一高生活、僅か三ヶ月の大学生、それから一年余の才月で短かい青春を消滅している。華奢で体力も無い、およそ軍隊に不適格と思われる彼が、その若い生命を異郷の地で絶ったのは何故!?

Nと格別の交際も無かった健治が彼に就てのこうした消息を知ったのは終戦後数年を経ての中学同窓会に出席した折だが、世話役を引受けた友は名簿通りのアドレスで便りのあった同期生が意外な程少いので苦勞したと言う。そういえば、この同窓会は淋しい程の人数しか集まらなかった。

無論消息はなくとも、戦時を乗りきって活躍している友もあるだろうが、次に記す連中は果してどうだろう。

C——中学卒業後、W大子科（文）入学、N同様に学徒出陣で海軍入隊、昭和十九年ビルマ沖海戦战斗中、行方不明。

E——T高商入学、学徒出陣で航空隊へ、以後消息なし。

H——K大子科入学後陸軍特別予備学生、南方○○島の守備

隊に参加、昭和廿年夏以降行方不明。

その他、五指に余る友人達が同様な経過で姿を消している。

あれから卅年近くを経た現在、健治も中学同窓の大部分の友と疎くなったが、前記の人々が、健在だったと云う噂は聞かない。Nを含めた彼等の生存が未だに確認出来ぬというのは、やはり二〇才そこそこの短かい一生をあの一時期に燃焼しつくして了ったと判断してよさそうだ。

(続く)

附記、戦争体験を文字通りドキュメントに綴るのは、何とも億劫であり、且つ記憶の不確かさ、完結までの枚数を考慮して適宜脚色する所存。従って「戦争体験記」のタイトルは外します。

焼いた財布

春日部市 村上徹子

団地の四階に住んでいるずばらの私は、買物の序にごみを捨てることにしている。

例の如くごみを入れた袋を更に買物籠に入れ財布はしっかりと掌に握って家を出た。

焼却炉に火がついているのを確かめ、そこを目差してごみ袋を捨てた。

しまった！ 手紙二通も一緒に捨ててしまった。それにはカラー写真が十枚程入っている、慌てて棒でとり出した。無惨に焼け焦げた封筒。だが中の写真は重なっていたのでどうにか無事だった。よかった。

残りのごみもポーンと捨てて、さてと買物籠をみた。財布がない！ 封筒を捨てて驚いた拍子に掌から離れてごみ袋の中におちたらしい。亦々棒で掻回したがさっぱりみつからない。家族の食事代と鍵が入っているのに、困った。それが無いと隣のペラングを伝って入るより方法がない。数回やったが、一度目より二度目、二度目より三度目と度重なる毎に恐しさも増して足がすくんでしまう。どうしよう。必死の思いで捜した。何か手応えがあった。確かに財布だ。ごみを入れていたＴストアーの袋の底に焼け残っていた。

やっとり出し焼けただけだがま口をあけてみる。鍵は真黒になっていたが大丈夫らしい。五百円札もそのまま残っている。手に取ろうとしたらポロツと端が欠けた。兎に角、アツアツの財布をハンカチに包んで銀行へ直行。理由を話すと「まだ温かいお札ですね」とニヤ／＼笑い乍ら真新しい千円札と五百円札百円硬貨一枚を交換してくれた。

このような時硬貨は便利である。一枚を除いて殆んど無事だったから。

それにしても、私は何とおちよこちよいなのだろう。その間二・三十分だったと思われるがすっかり興奮してしまった。誰一人、焼却炉に来なかつたのが幸いだった。

お恥ずかしい私の失敗談でした。

沖繩だより

那覇市 大城 貴代子

十月も早や中旬、こちらは二、三日前から急にミーニシ（北風を沖繩の方言でいう）が吹きはじめ、やつと秋らしい感じになりますが、山は紅葉することなく常にみどりで本土の秋をなつかしく想っています。いつも「わいふ」を読んでから書こう書こうと思っっている内に日々がうち過ぎていき、いつも気がかりにしています。先日わいふ93号が届き、はるばる遠いアルゼンチンからのお便りもあるのに、沖繩が遠いなど言っておれず、毎月一回は「沖繩からの便り」ということで、ハカキ位でもと決心しました。

こちらは去る十月八日、突然あらゆる金融機関がストップされ、去る八月十六日のいわゆるニクソン声明にもとずく「ドルショック」から県民の損害をなるべく少なくするというところで、県民の九日現在のあり金全部をチェックする確認作業が行なわれました。

発表のあった八日午後、沖繩ではあらゆる職場でも、街角でも、近所となりでも、このドルの確認作業ではちの巣をついたようになり、私ははじめての経験で、職場で話し合ったこと、即ち「今後はスタンプの押さない紙へいは360円の価値がなくなるので、つり銭や給料の中にスタンプのない紙へいが入っていたら受けとらないようにする」「自分の手持ちのドルは全てスタンプをつけないと、360円の価値がないのでだれも受けとつ

てくれない」など、又「一日も早く一ドル対360円に切りかえてくれればよい」など、日本政府のとった態度に不満をいうやら、今後どうなるのだろうとドルショック以来の不平不満などで仕事もろく／＼手につかないで家に帰るとニュースでは「スタンプを押ししたのも押さないのも一ドルの価値には変りない」など、何のことかさっぱりわかりません。当初は百万円に限って360円で保障すると報じたり、借金のあるものは、もっている現金と差引してその差分だけ差損保障すると言ってみたり、紙へいしか確認できないから一ドル以上を提出するようにと報じていたのに、硬貨も確認できたり、全く十月九日は（第二土曜日が沖繩では体育の日で休日）休日とあるのに一日中そう／＼しい日を送り、一体これから私自身どうなるのかと不安な日を送りました。というのは我々安サラリーマンには現金とてたくわえなどほとんどなく、昨年建てた家の借金が何千ドルとあるのみです。で、借金をしているのは得なのか、現金をもっていないのは損をするのかなど……

全く沖繩ではまだ戦後は終わってないと言えます。

結局一段落した今（十月十四日現在）いえることは我々県民のもっている現金は確認作業日の九日現在の預貯金、現金高のみは一ドル360円で保障されたということです。

しかし、今日からの我々の収入、今後復帰後の賃金は全く保障されず、本土からの輸入物価は15%位の値上げをし、それにつれてアメリカからの輸入缶詰等も軒なみに値上りし、全くふんだりけつたりの毎日です。

いよ／＼十三日から沖繩国会が始まるというのに、県民の自

治は犯され、基地は自衛隊が入りこみ、働く者の賃金は切り下げられるなど、だれのための復讐なのかと怒りを覚えます。

この次を書くころは、又新しい沖繩に対する動きがあらわれ、起きていることでしょう。

環君のこと

京都市 関 か お る (37) 会社員

この九月から娘(小学一年)が、プールへ泳ぎを習いに行っている。僕が海を好きで、今年の夏も近くの小学校のプールへ何度も娘を連れていったせいで、娘も水にかかるのが大好きだ。しかし、憶病で、いくら僕が顔をつけさせようとしても、こわがってつけない。妻は、泳げないために、船旅がいまだに嫌いだし、遊園地のボート遊びさえ、不安がってしない。娘をそんなふうにしたくないという願いが昂じたこともあって、毎週二度、バスに乗ってプールへ通っている。ひっこみ思案で、ごはんの食べる量も少なく、体も小さいので、いいことだと思っている。何よりも本人が、水につかることを大の楽しみにしており、きょうはとうとう顔を水につけたとか、きょうは大きいプールに入ったとか、飛び込んだとか興奮気味に僕に報告する。わざと、うそだ、うそだ、そんなことまだ出来ないはずだ、とひやかすと、必死にどもりながら、一生懸命、プールでの情景を報告する。

例によって、近所の噂好きの、うるさいお母さん仲間に、娘

がプールに水泳を習いに行っていることが拡まってしまった。一度うちの娘もつれて行ってほしいとせがまれて、隣りの美貴子ちゃんが同行した。一回行って、すぐくプールが気に入ってしまった。楽しくってしようがない。娘の方も、友達と一緒に喜んでいて。その次のプールへ行く日になった。妻が美貴子ちゃん宅に寄って、「どうするの、きょうも行くの?」と誘いに行った。美貴子ちゃんは、奥から飛んで来て、「行く!」という。しかしお母さんが、それをとめた。美貴子は、今、オルガンと習字を習いに行っている。これ以上、おけいこをふやすのは、少しオーバークだし、宿題や予習をする時間もなくなるというのがその理由だった。そばで、母の説明を聞いていた美貴子ちゃんの目から、突然大きな涙が、つうーとこぼれ落ちたそうである。美貴子ちゃんは、習字も、オルガンも、習いたくないらしい。母にせかれて、いやいや通っており、一向に上達もしないということである。そして一番楽しかったプール行きは、とうとうあきらめさせられてしまった。

ところで僕のレポートの中にこれまでも度々登場する、わが愛する環君(小学一年)のことである。

前にも書いたが、七夕のたんざくに、「はやくやめられますように」としたためた例の柔道は、その後もいやいや続けられている。ところが先日、投げられた拍子に、首をねんざして、むちうちと同じような症状を呈し、学校を休むはめになってしまった。九月にもこんなことがあった。一日中、朝から家のピニールプールで、くたくたになるまで遊び通し、夕方からまたいやいや柔道に行つて、その夜から膀胱炎になってしまったの

た。今、環君のお母さんは、この二つの出来事について、やっぱり、いやいや無理して柔道をやっているから、こんなことになつたのではないかと、反省しているそうである。

首の事故は、かなり重症と聞いていたが、学校を休んでいる環君は、パジャマ姿で、早くも家の塀をよじのぼったり、走り廻っているそうである。子供の、たくましい成長力、生命力を感じさせる痛快な環君である。

昨日、環君が妻に、「おっちゃん、どうしてる」とたずねるので、毎朝5時に車に乗って会社へ行つてると答えると、「へえー5時に！ 早いなあ。僕も5時に起きようかな」「緑色の車よ」「ようし、一辺見てやろう！」と言つていたそうである。環君が、本当にやりたいことを、思いつ切りやらしてみたいとおせっかいなことを考えている。

【お便り】

枚方市 川 中 重 雄

久し振りに晴天の日曜日に恵まれましたが、今は、拍子抜けしてしまつたようで、外出の計画もなく、只、呆然と、今日は在宅。

小鳥の世話と、バラの植換位が、今日の仕事となりそうです。若い人達は、今日辺りは盛んに外出しておることでしょうが、私共は矢張り友達と共同の約束をしておかないと、思い切つて乗り出せないものです。それだけ、尻が重くなつてしまつたことを意識してきました。

十一月三日には枚方市内の史蹟巡遊会を、市が主催でやりま

すので、これには参加することになっています。僅かながらの楽しみとも言ふべきもの。

お寺とか、神社とか、これの巡遊を楽しむのは、即ち、其の境地に浸ることの気分を買うためであつて、まだまだお寺詣りを楽しむというような気持にはなれるものではないのです。

其の静かな境内などを、歩き廻るときなどの気持は、申し分のないものですから。

詣つたからには、其の神様に向かつて、一応手を合わせて拝むだけの形式は整えるのですが、心の内では別に何も考えていないという、怪しからん態度というか、心境というか。

天罰などというものは、此の世にはない。それは只、自分が不注意であつたり、不節制であつたりするところから生じるものであることを、私は常に信じているのです。

神を信じるなどということは、全然認めていない私でも、只、自分の健康を維持するためには、前記の注意事項を充分考慮しているために、病氣などというものは、過去二十年間というものは一つない。

娘達が帰つてきて言うのです。

「お父さんは、憎くたらしい程健康ね」

「当り前さ、自分を守るべきは自分だよ。馬鹿氣た不節制をする奴だけが、早死にするのさ」

▽△

▽△

▽△

▽△

▽△

アメリカの旅から

宝塚市 斉藤 由美子

身体に強い振動を感じて、はっと眠りから覚める。数時間前にサンフランシスコを発つてから、この三週間の旅の疲れが、どつとあふれるように、払いのけることのできない眠気が私を襲っていた。隣席のアメリカ人夫妻が、「アンカレッジで、一時間の給油ですよ。」と声をかけてくれる。われにかえつて窓のブラインドを開けると、そこに広がった鉛色の海、からし色の林、そして、その向うのマツキンレーの山なみ、それらが黄昏れの夕日の中で輝いている。

文明の世界を飛び立って、今、この荒涼と孤絶した、それについて荘嚴な調和の美の前で、言葉では表現できそうもない感動を覚えたのだった。生と死の間の世界、瞬間、感覚的にそんな想いにとらわれる。ここを越えたところは、無の世界なのではないだろうか。死ということについてなど、あまり考えたことのない私だったが、その逃がれることのできない絶対性の中の孤独を、今、そこに感じて慄然とする。しかも、慄然としながら、このような静寂の無の中に入っていくことができるなら、それも又、なんと心安らかなことなのだろうとも思う。生きるという戦いのあとの安らぎを、神は全ての人間に、このような形で与えて下さるのだろうか。それに違いないのだと自分に言い聞かせずにはいられなかった。その無の世界は、キリスト教の教える神の国かもしれないし、仏教の説く極楽浄土かもしれ

ない。しかし、もうそんなことはどうでもいいのだ。死は、やはり生の終わりであり、永遠の安息所であるべきなのだ。長い歴史の中で、人間は神の存在の理解について争いつづけ、仏の解釈について議論しつづけ、そして、血を流しつづけてきた。

そのことがひどく虚しく感じられる。と同時に、この世を生きる人間が、宗教を持ち、そこから哲学を生み、神学を生み、思想を生んで、いがみ合いながら、生と死の問題に対決してなければならなかった、そのことの哀しみを思う。そして生きていることへの限らない欲望を感じるとともに、さまざまな形で、私という一個の小さな存在を支えてくれている人間関係の重み、私が関わりあっているいく人かの（いや、いく百、いく千、もしかすると、それは人類全てなのかもしれない）そういう人々の存在の尊さに気づく。死の瞬間までも、人間は一人では生きられないのだし、又、そうあつてはならないのだと。

この旅に出る時、私を取り囲む、日常化した退屈な環境と、その中で私に関わってくる人々から離れたい、一人になって、思い切り自由をと渴望していた。アメリカという国に特別な憧れを持って旅立ったのでもなければ、あちこちを観光して歩きたいというような望みはあまりなかったし、短かい期間で、あのように広大なアメリカ大陸をくまなくまわれるはずもなく、あらゆる面でのアメリカを知ることなど到底できるとは思っていなかった。ただ、未知の土地で、言葉も文化も伝統も習慣も、そして、もしかしたら思考方法も全く異なる人々の中に自分をおいてみることに、それには、強く湧きあがるような興奮があった。知識も道徳も感情も狭く限られ、混迷している自分という

人間を知るためにもと。

果して、異国での数々の経験は、私の中ではつきりした形に
ならず潜在している意識を、少しずつ明確にしていった。それ
は、いろいろな人々に会うことによって、はつきりしていった
といえる。

ミセス・チャールトン、実際、これがアメリカ女性だと思ひ
込んでいたそういうタイプの人物に、まず出会ったことは、私
にとつては大きな衝撃であつた。彼女は、四人の子供の母親で
あるが、二度離婚し、現在は図書館の司書として働いている。

「四人の子供と、二度の結婚は、私の大きいミステイクスでし
た。だから、ミステイクだと気がついた時、改めたのです。」

と彼女は言い切るのだ。「あなたにとつて、一番大切なものは
なんですか。」「もちろん、私自身の生活です、なにもものにも束
縛されない。私はいつも人生にチャレンジしてきました。子供
を育てながら大学にいったんです。」「これからも、一人暮らしを
して、司書として働かれるのですか。」「今は四十四才だからい
いけれど、六十才にもなれば、一日六時間の勤務は大変だから、
今、大学の講師になるコースを勉強中、一人暮らしは、保険をた
くさん払い込んでいるから、老後はノート、プロブレムです。」

「八十才のお母様がボストンにいらつしやるとか、こんな広い
お家で、御一緒に住まれたら。」「おお、彼女は、とても一緒に
やっていただけるような人じゃありません。チャールトン夫人の話
に圧倒されながら、しかしある反発が、私の心の中に広がって
いくのを感じた。

「日本の女性は、一度結婚したら、家庭を破壊させないだけの、

知恵と忍耐を持っています。」「少々うしろめたく思いつつも、こ
ちらも負けられないと、そう言い切ると、「忍耐！ナンセンス
です。人間を殺すものです。そう言つて、彼女は、ペルシャ猫
に頼ずりする。」

アメリカの家庭で驚いたことの一つは、ペットを、異常なほ
どの愛情で飼っていることだ。ネコやイヌをそんなに可愛がる
くらいなら、人間をもつと大切にしたらいいのに。それを目撃
するたびに、私はいつもそう叫びたい欲求にかられた。チャー
ルトン夫人が、ネコと戯むれるのを見ながら、彼女が心おきな
く愛せるのは、もの言わぬ動物だけになつてしまつたのだらう
か。しかも尚、愛情の対象は彼女には必要なのだ。一種のやり
切れなさを感じながら、利己的であることの報復が孤独なのだ、
いつか、なにかの本の中で出会つたこの言葉が、ふいと、この
時、私の中で大きく息づくのを覚えた。そして、私自身はどう
なのであらう。彼女の生き方を身勝手だと非難できるものをも
っているのだろうか。答えは否である。

彼女の人生観、それは、古いものを、いわゆる日本人のいう、
義理とか人情を少しも身にまとわず、ヨーロッパのキリスト教
的なものをもすつぱりと切り捨てて、開拓魂と民主主義、それ
に徹底した個人主義の中から確立されたものだといえよう。し
かも、彼女は、その人生観に少なくとも忠実に生きているのだ。

「現代のアメリカ人は、最早、人間を愛することができなく
なつたのです。大学で日本文学を学んでいるという、ジャック
青年はそう語りはじめた。」「アメリカ社会は病氣です。もう皆、
ばらばらに生きています。お互いに無関心になつてしま

うほど、恐ろしいことはありません。」「なぜ、人々はこのようになつてしまつたのでしょうか。」「文明が、自然に生きること、人間らしく生きることを断つてしまつたんです。」その知識欲から、高度の文明を生み出した人間が、その文明によつて殺されつつあるんだと、この文学青年は語るのだった。「しかし、ぼくは日本には望みを持っているんですよ。禅文化を生み出した日本人のすばらしい情緒。あなたがたは、自然を愛する優しさが、身体の中にしみ込んでいるはずだから。」

ここ十年来、禅はアメリカ人の間で、一つのブームになつてゐる。それは、戦前、この国で著作活動をつづけ、戦後も又、アメリカ各地の大学で、禅の講演を行なつてきた、鈴木大拙の活躍によるものだといわれている。宗教というよりも、むしろ彼の禅に対する思想が、物質文明の洪水に溺れる人々に、ある衝撃を与えたものともいえよう。いつさの形式を無視し、精神にその焦点をおくという禅の教えが、強くアピールしたことの意味は大きい。

日本人が、今、非常な勢いをもつて自然を破壊し、公害が、今や、日本の重大な社会問題になつてゐることを、この禅の信奉者に告げるにしのびず、おし黙つた私は、日本という国のもつ、文化と伝統の重みを考えてみずにはいられなかつた。この異国の青年から、逆に教えられたと思つた。わびとかさびとかものあわれといった、日本的なるものが、不思議なほどの懐しきで私に甦えてくる。あの風土の中から、われわれ祖先の生み出したものを、もう一度、じっくりふりかえてみる義務があるようにさえ感じたのである。

「話をもとにもどしますけど、人間が人間を愛さなくなつたということ、日本でも、断絶とか疎外とかいつて、お互いに理解し、いたわり合うということが、だんだん少なくなりました。私自身、時々、自分は結局誰も愛せない人間じゃないかと思つます。」「愛は意志だとぼくは思います。あなたが、あなたの周りの人たちに、あなたの住んでいる社会に心をかけるといふことだと思つます。恋は一時的な情感だけれど、愛は継続させるべき意志ですよ。」「アメリカ人のほとんどは、もうその意志を放棄したというのですか。」「その答えをぼくに求めるのは酷です。ぼくが社会に対して、絶望していることだけ言つておきましょう。」「又、一人のヒッピーが生まれるように思つます。」「ヒッピーにはなりません。ぼくは勉強をつづけたいから、真理を求めたいから。真理までの距離が長ければ長いほどいいと思つてゐるんです。」

爆音を発して、飛行機がアンカレッジを飛び立とうとしている。先刻、生と死の世界だと感動したその広がり、暗やみに包まれて沈黙した。今私は、あんなにも逃げ出そうともがいた、私の場所に帰っていく。たぶん意志をもつて私の人生を生きるために。ジャック青年の最後の言葉が、ふいに新鮮なひびきをもつて私をゆさぶつた。私のようなちっぽけな人間にも、なにかひとつ、真理を求めめる道があるのではないだろうか。大きく歩を進めてそこに近づくことはできないまでも、小さく一歩歩き出す。そんなところみだけでも可能なのではないだろうか。

何くそ人生物語

大阪市 春野 董

はじめに

私は有名な小説家になろうというだいたいそれた考えをもたないけれど、何かこう自分の頭の中を整理したい、心の中の私と、対話してみたいと思ってこれを書きはじめました。

学生生活においてもビリ一番の私だったので、頭の悪い私が何を書くか知ららと思ったところで、筆が遅々として進まず困っています。

小説より記録と思つて頂けば幸に存じます。先ずはご笑読下さいませ。

(一) 生いたちの記

私は大正生れそれも末期、最悪時代に生を受けました。みんなから、それも祝福されずにと申しますのは、私の生母は今でいう二号夫人だからです。

今でこそおめかけ、つまり二号夫人といえど、堂々と暮らしている世の中です。

その時代は日蔭もんといつて、人目をさけて細々と暮らしていた時代。もう生母はとつくの昔にこの世の中とおさらばしているし、養母も四年前の春、食道ガンにかかり、あえなく死去しましたので、生母が生きていてくれたら、私にとって物を書

く時に色々と参考資料になるのになあと思うのです。

人間つて勝手な者です。娘時代の私は、あの女は？ 鬼か蛇か、小さな私を捨てて、よおし！ 今に見ると、末おそろしい考えに身も心も狂いそうになったことが、今思い出しては身震い致します。

生母は、その頃十三才位だったでしょう。単身淡路から、大阪に嫁入りしている姉を頼つてやつて来たらしく、生母の姉は天満のメリヤス問屋に嫁いできて何不自由なく暮らしていました。

生母は、小学校を卒業すると、大阪の中学（旧高女）に入學してそれから専門学校に入り、教師かデザイナーを夢みたようです。

生母の姉は丁度二人目の子を身籠つていて、問屋なので従業員の生活にあけくれ、忙しい体であったし、女中も三人使っていました。が、なんせ広い家の事、掃除がたいへんでした。

それに商売の方も繁盛していて、忙しゅうて忙がしゅうて、これが目も廻る忙しさというのでしょう。そんな時、末妹が田舎からやってきたので都合良かったでしょう。生母が訪ねていった時は快よく迎えて呉れました。

生母の姉（私の養母）と生母の二人の人生がどう変わるやも知らないでいました。

生母の姉の件侶もなかなかいいその良い人だった。

「よう来て呉れたなあ、つかれたやろ、まあまあ気い楽にしい、なあ優子ちゃん」

と快よく迎えて呉れた。

生母の為、こじんまりした部屋もあたえてくれて、

「ここは三畳でせまいけど、幸抱してな、なんでもほしいも
んあったら遠慮せんと兄ちゃんにいいや、ええか」と
いった調子に、生母も、

「ええにいちやんやなあ、ほんまうちはずせや」と
思つたことだろう。

ときばきと何もかもやつてのける姉に比べておっとりとした
生母。姉の為によく働いたし、女中達とも仲良くやつていたよ
うです。番頭や小番頭も、そういう生母をみて、あの娘が年頃
になつたらうちのむすこの嫁に、わいの嫁はんにと思つていた
と人伝にも聞いたりしました。

生母は色が白くてすこし下脹れの髪は黒くて肩までたらし、
丁度その頃、抱き人形の市松人形のようにであつたと。

光蔭矢の如しとかいって、月日は流れて一年はまたたく間に
過ぎ去つて行つた。

ある日の事でした。生母は姉に向つて、

「姉やん。……わたしお願いがあります」

と口ごもつていった。生母の姉は、

「何んえ。……ああしんき。何んやねん……ぐずやなあ……
早よう早よう。何んやの、わて忙しいんよ、はよいいなはれ」

「そんなにいうたら、わたし何んもいんよになら……」

「……ええ」

「ねえやん。学校へいきたいのん……」

「……何んやて、学校？ 学校つて女学校か」

「そうやねん」

「女子いうもんは学問なんぞいらんえ、生意氣ばっかりい
て、なあ……優子……やめとき……それよか、花嫁はんの修業
して、いいお嫁はんになつとい、それでいいんよ、それがい
ち、女子の幸福なんよ」

「……そないいうてもわたし勉強がしたい」

「そんなき分けのない子、わては知らんえ。だんさんの手
前もあるし、困つた子や……」

といつて、生母の姉は忙しそうに店へ出ていつてしまつた。

生母はその夜はととてもと寝むられなくて、奥の間に休ん
でいる姉をくどきにいふたそうな。

「そんないふことか子、わては知らん。そんな子とつと
と淡路へいんでしま」

生母の姉はヒステリックになつて叫んだ。生母はシクシク泣
き出して、自分の部屋に入ると「ワァー」と泣き出した。

「なんや、大きな声だして、どうしたんや、姉妹げんかか。
みつともないで」

兄ちゃんの声がかこえた。商用で東京から帰つて来たらしか
つた。

「だんさん、おかえりやす」

番頭や丁稚の声が威勢よくきこえる。

優子は泣くのを止めてきき耳を立てている。するとふすまが
さつと開いて、

「優子ちゃん、何んでも兄ちゃんにいいやつてあれほとい
つたのに、みずくさい。兄妹やろ、こまつたことあつたら、
わいにいい。良枝にきくところによると、女学校に行きたいと。

それはええこつちや。いまの女子は勉強もせんとあかん、まかしとき、あした願書もろてきたるさかい、心配せんでええ……
……そんでなあ、どこがええんや……」

「わたし、わからへん」

「それそうや、大阪へ出て来て間がないもんな、大手前か、清水谷か、それとも夕陽丘か」

兄ちゃんはどうけ学校の名前いうたけれど優子は迷ってしまった。しばらくだまっていたけれど、一番最初にいった大手前という名がまだ耳の底にのこっていたのだろう。

「……ハイ、大手前」といった。

「よっしゃ、吉やん明日でええからなあ、大手前の女学校にいつて願書もろてきてんか、頼んだで」

「へい、よろしおます」

吉やんという丁稚がビヨコンと頭をさげて室を出ていった。

「優子ちゃん、心配せんと明日までようおやすみ。ほんならおやすみやす」と室を出ていった。

生母はその夜嬉しくて寝られなかつたと聞く。

あくる朝、願書を貰ってきて、早速書き提出した。

試験の日は、生母の姉はもちろん、店のもんはそわそわとして仕事が見つかなんだと。試験は無事に受かつて、

「良かった、良かった」

「よろしおしたなあ、優子はん」

祝福の音が、ことに兄ちゃんのよろこびようときたら、我が娘が受かったような声をあげて、とびあがってよろこんでおった。これは天王寺のおばあさんが話していたのです。天王寺

のおばあさんというのは、董の祖母なのです。

店の者一同、生母の入学祝いにお赤飯がでて嬉しそう。でも生母の姉だけがむつつきりとしていたので、生母はそれが心配で、
「姉やん、わがままばっかし、ごめん」とひとことわびるのだった。

生母の姉は、兄弟姉妹ようけいるので、口べらしのため大阪に出て女中奉公していた時に、働き者で器量よしとみとめられてこの店に嫁入りしたので、進学しなかつたけれど、あきらめてこの店の御寮さんになったのであるから、色々と御寮さんとしての気苦労もあったのでしよう。自分も優子のように学校へ入っていたらと、すこしうらやましく思ったもの。

「……ええ、なんえ。ごめんねてか、わてにか、わてはかまへん。それよりだんさんによろしゅうお札をいいなはれ。優子、学校受かつたんやから一生懸命勉強するんえ」

「うん、おおきについていっときました。姉やん、ほんまにほんまに、おおきに」

あとは、涙。

「泣くひとあるかいな。優子、もうええんよ。ほんまによかつたなあ」

姉妹は抱き合つて泣き出した。

生母の姉が四女を身籠つた。そして生母が無事に女学校を卒業する日がやってきた。

振り袖姿の生母は人形のようにあでやかだったという。

この日の為に、生母の姉が仕立てて呉れたそうで、生母の姉

は、忙しゅうて忙しゅうてといっているが、それであつてもよく縫物をしていた。手早く、仕立てもなかなかのものである。手八丁、口八丁のご寮さんと、申し分のない人格で、死んでもからもみんなから思い出話に花が咲く。

生母の姉は、無事四女を出産した。その子は雪のように白うて、美しい娘であつた。

「幸子」と名付けた。名前のように幸福そうな福ぶくしそうな娘であつた。

生母の姉は命名については、なかなかの人で、長男にしたつて、君に忠行、親に孝行と、「忠孝」と命名した。長女は「君子」。聖人君子にあやかつたのだから。

君子が小学六年生のある日、チプスの予防注射があつて、熱があつたもので、

「先生。うちきょうしんどのです。すこし熱もおます。注射やめさせてください。」

「少々熱があつてもええやろ。お上からのおたっしやから心配せんでええ。」

と、嫌がる君子の細い腕にプスリと、注射針がつきささった。

あまり丈夫でない君子であるから、その夜から高熱を出し、とうとう桃山病院行きになる。法定伝染病であるから家ん中は土間から流し口にいたるまでそこらへんは、あの嫌な臭が充満して、近所の人達は、

「まあ、小さいのに可愛想なことでおますな」
まゆにしわ寄せてささやき合つていた。

君子は高熱の為にうわ言を口走り、とぎれとぎれに、苦しい息の下から、

「先生。せんせい……せんせい……バカ 一生うちはうらんだる。……清水谷……清水谷……清水……谷」

と受験校の名前をさげんで息たえた。

その時のギョウ相は、誰人も顔をそむけなくなるような、コワイ、オソロシイ顔だつた。これが六年生の子供の顔かと思つたと今だにおそろしゅうてと、養母が口ぐせのように、人々に語つていた。

生母の姉の四女が二年目の春。はしかにかかつて、あつという間に死んでしまつた。

熱が高くて乳もお茶も受けつけぬ「幸子」を毛布にくるんで、あたふた病院にかつきこんだ。

生母の姉は、呆然として毛布にくるまれた幸子を抱き店に帰つてくるなり倒れてしまつた。

「ご寮はん。どないしはつたんです。しつかりおしやす」
丁稚の吉やんが抱きおこした。

「……吉やんか。おおきに。……どないもこないもあらへん……あんまりや……あんまりや……幸子を……幸子を……殺された」

「ええ。なんだすて……」

半狂乱になつた生母の姉は、ただ泣くばかりで、店の者はとりつくしまもない。

生母の姉が、気持もおちついたとき、兄ちゃんはじめ店の者がきくところによると、

「わてが病院へいって、先生、この子助けてやっておくれや
す。なあ、先生。おたのみしますといったら、先生はこの子の
小つこい腕に、君子みたいにブスリと注射しはった。わて、こ
うてこうて顔に手をあててようみなんだ。しばらくして、先生
なんの注射だすってきいたら、キョウシン劑だといわはって、
しばらくすると幸子の相が変ってきたんや……どうもおまへん
か先生、と、わてきいたら、先生は幸子の臉ひっくり返して、
ごりんじゅうです……て」

そういうなり生母の姉は、ワァーと泣き出した。

そして生母の姉が、小さなむくろとなった幸子を抱き、表か
ら出ようとしたら、こちらからどうぞと、裏門から出るという
そんなことあるかと思つて、それでも裏門から出てきたんや。
あんまりや、あんまりや、といいながら走つて帰ってきたんや。
それから、わて、目の前に黒いもんがさがつてきて、わからへん
ようになったんやと涙ながしながら話すのだった。

「そんな殺生な、むごおますな、ご寮さんいしつかりおも
ちやす。わて、いってどなりこんできたる。まつといやす」

そういつて吉やんは、病院へいってかけ合つたけれど、病院
は、最善をつくしたからと、話にならなかつた。

まもなく、小さな柩がしめやかに出棺された。

阿呆のようになった生母の姉は、しばらくぶらぶらと日を送
るようになる。その姉を、生母はよく看病した。店の者も生母
を助けてよく働いて呉れた。

妻は心の病氣。そして商売は不振。その上銀行がつぶれた。

昨日入れた金はヘイサ。

悪状態が続いた生活に、兄ちゃんの心はどないやろ。帰りがだ
んだんおそうなるし、兄ちゃんの生活に乱れが来て、店の者も
みんな暗い顔しているし、心痛めた生母は思案に暮れるのだつ
た。

心のうさの捨てどころ、こんな歌が流行りだしたのも、そん
な時。歌の文句ではないが、何げなし買つた馬券が大当りして、
氣を良くした兄ちゃんははずるずる深みにはまってゆき、競馬通
い。そして「一丁、やつたろか」と、株にも手を出した。元も
子もなくした兄ちゃんは、しょぼんと帳場に座つて頭を抱えこ
んでしまふ毎日だった。

最後までこのつていた番頭の兵さんはこれまでとみきりをつ
けて、

「だんさん、わて……」

と、もみ手しながらいいだした。

「何んや、兵さん」

「……長いことお世話になりながら、こんなこというのつろ
うおます。けど、わてももう年でおますさけい、田舎へ帰らせ
てほしいのです……すんまへん」

と、申しわけのういいだすのだった。

「長いこと、ほんまに兵さんにも苦勞かけたなあ。おまはん
のええようにしい」

そういつて、帳場台から千円程だして来て、

「これもつて帰り。体に氣いつけや。おまはんとこの家のも
んに何かみやげでもおもつてるんやが、こない何にも買えんよ
うになった、わいが悪いんや。かんにんしてくれ」

「だんさん……そんなに気をつかわんとくれやす。それよりも、だんさん。ご寮はん、お大事に。ほんならこれで……」

兵さんは田舎へ帰って行ってしまった。

「あああ、みんないってしまた……なさけな」

心の荒さんだ兄ちゃんは、のめない酒を無理にのみ、夜の町に出ていってしまふ。心の病気にかかった姉ちゃんはああよしどないしよう。優子はひとり机の前で読むのでもなく本のペーシをペラペラめくっていた。

時計が「ボンボン」十二時を打ち、ねむくなった優子は、ふとんにもぐりこんだ。

胸が苦しくなつてもがいて、目がさめて、びっくりした。そこに兄ちゃんの顔がのつている。

「兄ちゃんやめて……ゆるして……」

もがいて逃げようとしたけれど、細っそりとした体の優子には、大の男の力をどうすることも出来なかつた。

「優子ちゃん、かんにんや、ごしようや、わいの、わいの気持を察して呉れ……」

優子を犯してしまった兄ちゃんは泣いていた。その涙をみたとき、優子は可哀相になつてしまつて、そこは女の性のはかなさ、かなしさというか、ずるずるとドロ沼にはまっっていくのだった。

初めて知つた男の肌。忘れよう。そして、この家から出てゆこう。荷物をまとめ、ポストンバッグを抱えて……でも……姉やんがと思つたら、そうもいかない。心とうらはらに身体が燃える。

そうこうする間に、優子の体に変調を見る。そこは女の第六感で、姉やんが、

「優子どうしたん。この頃ちいともお風呂に一緒にいらんね。今日はわてが流してあげる」

というので、しぶしぶ湯殿に入つて来た優子の乳房をみた姉やんは、目ざとく、

「優子、あんた、男が出来たんと違うか、何にもはずかしいことあらへん。わてにいいなはれ、どこの男衆や」

「姉やん、かんにんして、かんにんしておくれやす」

「かんにんして、いい人やつたらそらかめへん。優子が幸福になるんやつたら、ちゃんと嫁入り道具もこさえな、ないなはれ、どこのお人やねん」

「姉やん、かんにん。わてがわるおした、かんにん……」

そういつて優子は泣きながら湯殿をとびだしていつた。

「……なんで、あの子おかしな子や、……ハッ……もしかしたらだんさんと」

その夜、良枝は狂つたように夫をせめた。世間でありがちな出来事だ。私の母は、それから淡路へ追い帰らされるが、淡路の身よりからも、悪い女子やなお前はと、家の敷居をまたがせて貰えず、また大阪に舞いもどつてくる。

兄ちゃんの家にも帰れず、困り果てた優子は、大阪の街をさまようのだった。

兄ちゃんから貰つたお金で、二三日は宿屋にもとまれるが、それからどうしていいこう。女中でもと思つて、ハリ紙をみて歩いた。こんな時勢だから、なかなか住み込みの女中もなくて、

色町にでも出てみようか、と、思つて歩きだしたときだった。

「優子ちゃんやないか。ええ、どうしたんや」

優子の悲しい話をききながら、

「可哀相に。みんなわいがいかんかってん。かんに入してくれ……わいが……」

優子は兄ちゃんと自分の子供が出来たことをうちあけた。

兄ちゃんは困つた顔をして腕を組みしばらくだまりこんでいたが、

「何とかする。わいにまかしとき」

そういつて市電に乗り、天王寺で細々暮らしている両親に、優子の身を相談にいった。

天王寺のおばあさんは、優子を快よく迎えて呉れた。おじいさんも物静かな人で、和歌を詠む人で、床の間には菊の花が美しく活けてあり、何やらすらすらと美しい字の掛け軸がかかってあった。

美しい京美人の祖母、おっとりとした上品な祖父。二人が、かわるがわる息子のことを詫びるのである。

優子は室の隅で、小さく小さくなつていたけれど、この老人たちはいい人だと思つて、にっこり笑み返した。

「もう出来てしまったこと、いくらいつても仕方ないもん。よろしおす」

すげのうしたら、この子死んでしまふかも知れへん、そんなことふびんになって、それから祖母はあちこちと家探しに歩く。丁度手頃なしもたやがあつて、優子を住まわすことになった。

「……ややこがでけるまでうちがようみてあげる。そうどす

よつてにな、安心して元氣な子産むんどすえ」

兄ちゃんには、「あんまり家にきたらあかん。良枝さんが気いもみはるさかい、よろしおすか」

そう気を使う祖母。優子はあまよかつたと思つたことか。

しもたやは、祖母たちの表通りから、すこし横丁入りの路地裏のひっそりとしたところだった。ときどき目じろや、秋になると、ヒヨドリ、もすがきてさえずる。向かいの二階から、三味の音が、チントンシャンときこえてくるし、いいところやなと優子はほほえんだ。

昔はこのあたりは、ミカン畑や茶畑があつて、その他、桃の花がよう咲いてと、おばあさんは優子のところへきて話してゆく。

ときどきは長うたがきこえてきて、きつとお向いの人は長うたのお師匠さんが住んでるねんやろ、いい音色やこと、と、優子は縁側でききはれている。それもそうで、淡路は人形しがい盛んで、太三味線の音は、しよっちゆうきいてるし、こうして、長うたの三味線は、太三味線と違つて、又、格別や。胎児が盛んに動き廻るようになった大きな腹を、ポンポンと鼓のようにたたきながら調子を合せて、ホホホと笑つていたとか。

それで、私(董)が三味線や琴に興味を覚えるのも、生母の胎教のおかげかなと思ふのです。

表通り、本通りは、いつも賑やかで、とくにこの日は、夜店が出て一段と賑やかになる。

時たま訪れた兄ちゃんに、

「夜店へ連れていっとくれやす」と、生母はせがんだ。兄ちゃんは、

「大丈夫か、優子ちゃん、お腹の子にええんか」

「ややこ産むまでは少々運動せなあかんのですって、おばあさんいってほりました」

「そうか、そんならすこし歩こか」

そういつて二人は、手をつないでそぞろ歩くのだった。

たこ焼を食べながら、みて歩くのが好きな優子を見て、可愛いいな、キューンと胸があつくなくて、ひとしお抱きしめる兄ちゃんに、

「あんまり抱きしめたら、ややこがつぶれる」と泣き笑いしている優子を見て、久し振りに兄ちゃんの顔にも笑いもどってきた。

「お母はん、あんまりきたらあかんいいよったけど、わいはここへ来ると池の鯉といっしょや。わいは、わいは、優子ちゃんがいとしいのや、ええやろ」

「あきまへん。はようおかえりやす。姉やんがまつてはります」

「なんや、あんなやつ、ガミガミ／＼いいよって、いやや、今晚はかえれへんぞ」

「あきまへんて、あきまへんて、なあ、またきとくれやす。それまでまつてます」

「そうか。そんなら今晚はかえる……けど……な、浮気したらあかんぞ」

「なにゆうたはりますのん、こんな大きなお腹してて、誰が

浮気できます」

「それもそうや、そなら、大事にしいや」

「おはようおかえり。兄ちゃんも気いつけて、おやすみやす」
そうこうする間に十カ月は過ぎようとした春四月に、私(董)が産声高らかに大きなお腹から飛び出してきたのである。

丸々ふとつて玉のような女の子。生母は美しい顔が桜の花の色みたいになって、それは黒々とした髪の毛が波うち、本当に綺麗やつたと、兄ちゃん(私の実父)が、私だけにいつていた。私(董)も色が白うて、髪の毛がお母はんにて、はいはい人形みたいやつた。実父は目を細めていうのである。

「そうかしらん私がね、そんなに可愛かったん」

「ふんふん可愛かったで」

年をとつた現在でも、見えない目をショボつかせていうものだから、ときどきおかしくなって思いだし笑うことがある。

そんな時、私の娘や息子達は、私の生いたちをきいて「オエー」と、おどけるので、悲しくなつて泣きとうなるのです。



父の死

東京都 倉田紀子

わいふ94号ありがとうございました。毎号楽しみにしていましたが、特に矢崎好子さんの「PTA改革の戦略・戦術」を溜飲の下る思いで読んでいます。記念集会の案内をみて、もう八年になったのかとびっくりしています。ここまで続けて来られたのは、編集部の皆さまの力の大きさにほかならず、不良会員の私はコンプレックスを感じると共にファイトを出すべく自分のお尻をたたいている次第です。四年前始めて記念集会に出席した時、同じ思いの仲間が大勢いるという満ち足りた気持ちで暗くなりかけた山道を、子供にアンパンなどかじらせながら帰りました。その新鮮な思いを、いつまでも持ちつづけたいと思いつつ、それを果していると言えない自分を恥じています。

父を膵臓ガンでなくしました。ガンの恐ろしさは、今まで聞いたより読んだりしていましたが、治療の方法がないというのは何と残酷な病気でしょう。膵臓は、一つしかなく、切除も出来ず気安めの投薬だけという消極的なことしかしてあげられない周囲の心の痛みは何とも言い様がありません。秋口になり、かねて名前だけは知っていた日本医大の丸山博士の作られた丸山ワクチンが、患者の診察をしなくてももらえること、ガンの末期的な症状である苦しみをやわらげてもらえることなどを知り、きょうだいが力を出し合い都内を走り、上野から汽車で新潟へ運びました。しかしワクチンのアンプルの3本目をうったお彼

岸に、それは不要になりました。ワクチンの効果は、でなかった訳ですが、嵐の様な中で、暖かで真摯な博士の人柄に接しられ、又「かならず治りますよ」と力づけられたことは、私の、いつときの、それでいてとつても大きな安らぎでした。

床ずれが出来るほどの長期療養でなく(寝たりおきたりしていました)自宅の庭で、梅、桃のつくのをみていた父が、最後の日まで、意識も言葉もはっきりしていて、食欲もあり、末期の苦しみは半日位だったときかされた時、「……でも、よかった」と、私は言ってしまうました。私は、きっと悪い嫁なのです。いのちは、何にも増して尊いものです。誰だって解つていきます。どんなに、苦しくても辛くても、一日でも一秒でも長らえるのをのぞむべきなのに。

小学一年の長女、四才の次女に、このことを何と話してよいかわからず、亡くなったこと、人間は、神様が、ドロで形を作り、息を吹きかけて魂を入れたのだから、肉体がなくなっても、魂は残ること。(私は無信仰です)そしてその魂は、みんなの心に少しずつ分かれて入り、なくなってしまうものでないこと。という風に車中話してみました。棺の中の父と、箱の中に入る程小さくなってしまった父を実際に見た子供たちは、七才は七才なりに四才は四才なりに、人の死ということについて考えようでした。親の「事実を見せるには効なすぎないか」という危惧は不必要でした。そしてこれ丈のものを、とうてい私は口述で伝える自信はないのですから。長女は「読売ランドのなし畑(長女だけ、同級生のお母さんになし狩りに連れて行っていただいた)のところにお墓があるの、お花が咲いていて、

ちようちよも来てたし、よく日かげになるしお日様も当るところなの、おじいちゃんそこにいれてあげよう、いつでも行つてあげられるし」とか、「私の方が（妹より）大きいから、早く一人で汽車にのれる様になるから私がおばあちゃんの家のおそうじやごはん作つてあげるから、かおるちゃんは、パパとママが年よりになるから、パパの家のごはん作ることにしたら？」と、さつさと決断してしまいました。次女は「かおちゃんも涙が出ちゃった」

私が嫁して、義父の前に座つた時「嫁にやつた娘が帰つたと思ひ、娘と同じに思います」と言つてくれた父、この夏、帰省した時、お茶をたてながら人生観を語つてくれた父、私の実の父より多くの思い出が残つています。

父を思う度に、私達の様な者がなくなるために、ガンの研究がもつと進められてほしいと思います。

【お便り】

光市 野村 和子

誌代切れ／＼という字をひやりと胸に受けながら、それでもわいふには未練があるし、送らねば／＼と思ううちに忘れてしまつたりで、失礼しました。

此の一週間体をこわして床にいたものですから、忘れぬうちにとりあえず千円御送りさせていただきます。健康であるという事は嫁の座にある者は時として損をする事でもあると思ひます。休む事が出来ませんもの。舅、姑という存在が大きく在り、その封建性を美德としてのさばり返っている夫の両親に対して私は服従も忍耐も否定し、唯心の中で反抗し続けている生活で

す。

書きたい事は一杯あるのですけれど……。

わいふ八周年記念集会の報告

冬空を思わせるようななどんよりとした空模様。沢山来ていただけるかなと思ひながら、会場の準備をしていますと、まず最初に八年間かかさずに御出席の森かなえさんと、今年がはじめての河本浩子さんのお顔がみえました。

当日、バザーの品を持参された方が多く、その値段つけに意外と時間がかかり、一段落した時は一時半をすぎていました。早速、斉藤由美子さんの司会で皆の自己紹介から始まりました。単なる自己紹介丈でなく、近況とか、現在持っている問題点なども話していただきました。以下その時の模様を、不十分ではありますが誌上で再現してみますと、

森かなえ 八年間一度もかかした事がありません。最近はなんにも書かなくてすみません。一行でも二行でも書くようにしたいと思つています。

司会 森さんは高木さんのお母さんです。そして古くからの会員の方は御存知でしょうけれど、生活の中からにじみ出た文を書いていらつしやつたんですけれど。

河本浩子 共かせぎをしています、わいふにはこの子（三才位の坊や）を森さんにみていただいている事から、森さんにすすめられて入りました。やはり共かせぎの記事に一番ひかれます。共かせぎは何もえらい事ではなく、あたり前のこと

ですけれど、忙しくって書くひまがありません。

定松英子 はじめてで、来るのに勇気がいりました。高木さんに電話しましたら駅から十五分位いう事でしたのに、まよってまよって三十分もかかりました。

高木由利子 八年の間で、やめようかと思ったことも何度かありましたが、その度にみんなの声にはげまされ、今日を迎える事ができ本当にうれしく思います。今の生活で、二つの問題をもっています。一つは自分自身の生きがいの問題です。

四年前仕事をはじめた頃は、家庭と仕事を両立させる事で精一杯だったのですが、自宅と事務所を一緒にするようになってからそれが割合楽に出来るようになりました。仕事にも大分慣れて、あまり苦勞せずにやっていますし、そうなるし何かもつと別の生きがいみたいなものが欲しいんです。苦勞がないと生きがいがありません。創造する苦しみが生きがいにつながるようです。斉藤由美子さんがもう一度大に行つて勉強しなおすなんていう話を聞くと、本当にうらやましいなと思います。もう一つは子供の教育の問題です。私の今まで読んだ本には、子供の勉強は絶対親が教えたり手助けしたりしてはいけなさと書いてあります。私も頭の中ではそれを正しいと思うのですが、現実には小二の長男が勉強で悩んでいるのをみると、やはり一緒にみてやったりしています。理論と現実とちがうので、これでいいのかとまよっています。十日市睦子 編集の仕事をしています。さぼりまして、きちんとちゃんとやっつけていけないのを申し訳なく思っています。一番上の子がまだ幼稚園ですので、学校や教育の事はそんなも

んかいなという位にしか感じられなくて。関心のある事は、下の子供が（今二才ですが）四才位になる頃に何か自分の仕事をはじめたくて。それで、何が自分に向いているのか、才能があるのかどうかそんな事がなやみです。家に色んな人が泊りに来るので、その人達から刺激を受けています。私は外に出るのが好きなので、外へ出たいです。

後藤美和子 「わいふ」には沖繩にいる時に入りました。今度転勤になり大阪府箕面市にきました。学校の方もまだかわつて来たばかりでわかりませんので悩みはありません。この頃書いていないので、しきいが高い感じできました。

笠原嗟枝子 明石から来ました。皆えらい人ばかりで困りますわ。出るのがきらいで、子供もないし犬と遊んでいるだけですわね。高木さんの事が新聞にのっているのをみて入りました。高校時代同じ組だったんです。

草刈土岐子 英語をしゃべる外国人に日本語を教えているのですが、八時間労働じゃないので、皆からヒマだろうと色々雑用をおしつけられて困ります。八時間も働いたら体がまいってしまふタチなのです。悩みといえば一生の仕事がないのが悩みです。いまの仕事が生きがいではないんです。だから月給もらうの気がひけて……

坂元礼子 茨木から来ました。人前でしゃべるのがが手で、胸がドキドキしているんです。私は朝日新聞に紹介された記事を読んで入りましたが、「私の受けた教育」に新鮮な刺激を受けました。

司会 最近の「わいふ」はどうですか。

坂元 井戸端会議の延長のような感じがして、それもいいが、やわらかいムードの中にもピリツとしたものが欲しいと思います。

杉本輝子 体が悪いので、精密検査を受けているんです。だから日頃は自分で詩を作り曲を作って口ずさみ、出来るだけ明るくするようにしているんです。

(御自分で作詞作曲された「ふりむかないで」と「子供をなくして」という歌をうたって下さる。)

司会 曲も音符に書いて御自分で作られるのですか。

杉本 メロディも自分で作ります。はじめは童謡をやっていたのですがこの頃は歌謡曲ばかりです。

上田吟子 P T Aで新聞の編集をしています。月一回、音楽会(民音・クラシック)に行くのが楽しみで生きがいです。千円位で一流のがきけますし。学校の友達といきます。

司会 前はよく童話など書いていらっしやったのに、どうしてこの頃は書かれませんか。

上田 子供がわずらわしくて、ひとりりで考えるひまがないのです。

浜岡哥代子 今まであまり過去をふり返らない生き方をしてきたのですが、今度はなつかしくなかってやってきました。(注 昨年仁川より神戸へ転宅)私は「わいふ」に自分から入ったのではなく高木さんの魅力にひかれて入ったようなもので、そのへんが少し違うところなんですけど。今まで(仁川在住の時)つき合いが広く、自分の意志と関係なく人の関係で動かされているのがわずらわしかったので神戸へかわったのを機

会に家の事や本を読むことに専念したかったです。それが草刈さんと斉藤さんが来られて「家事専門にしているにしたらきかないね」といわれ、私はやっぱり夫や子供のめんどうをみて家事だけやっているより外に出る方が向いているのがよくわかったんです。それと友達が欲しかったので、幼稚園の P T A の役員を頼まれた時ひきうけました。だからもっぱら幼稚園に奉仕してます。でも子供が学校へ上って時間が出来たら、本腰を入れてやる仕事をしたいと思っています。

司会 ピアノをもっと勉強されるという事ですが。

浜岡 まあ、ピアノを習いたいんですけど、月一万円位かかるのでなかなかそこまでは。(注、仁川にいらっしやる時はピアノ、オルガン教室をやっておられた)

石川美智子 「わいふ」には古株なんですけど書く方は新米です。我々は生活するのが精いっぱい、精神的なゆとりがないんです。「わいふ」の人達はみんな何か習いたい、自己を高めたいといわれて、レベルの高いところに焦点があるように思えます。私の住んでいる団地の人のほとんどが内職をして、その日が無事にすめばそれでいいという考え方なので、何か向上したいと思つて外に出る、するともうまわりから「石川さんはひまやから」とか「インテリぶつて」とか中傷が入るんです。「わいふ」は女優のあつまりみたいで、それから自分の家庭や夫婦と「わいふ」のとはずれがあるように感じられます。夫との関係でもずれを感じて。夫は家庭に、テレビでもみてゆっくりくつろげる場だけしか求めていないのが物足りないのです。ママサンバレーボールをやったり、夢は沢

山あるんですけれど。

司会 結婚生活もベテランの森さんはこういう問題はどうぞされているのですか。

森 なんでもやりたい事をやって苦労したら自分がみがかれるんところがいますか。悪口を言ってくれる人は自分をみがかれる人やと思ってます。やりたい事のためには自分の家庭はほどほどにしてたらいと思えます。私なんかも老人会の役員してますけど、研究会なんかの時は朝早く起きてお父さんのご飯の用意だけはちゃんとして出ていきます。それに何いうてもあんまりとりあげません。はいはい言うて好きなようにしています。

斉藤るり子 表紙絵を書いています。長年書いていますと、題材もなくなってきましたし、自分の能力の限界を感じます。どなたか代って下さる方があったらお願いしたいんですけれど、でも草花を描くということは私にとって自然のこまかいいなみがわかって心がすくわれるんです。二カ月前、盲腸の手術をしましたその後遺症で足がひきつり動きにくかったものですから、健康あつてのものだとつくづく思います。皆さんも健康には呉々も気を付けて下さいませ。

鈴木芳子 高木さんの会社に雇ってもらっていますが、給料に合う仕事ができなくて。仕事をはじめてまだ日も浅いので、毎日バタバタしてまして、今のところ時間のゆとりが全然ないんです。

河内山小夜子 二年前、九州の小倉から仁川へ引越して来まして、鈴木さんから「わいふ」をみせていただいたて入りました。

いつもみんなに感嘆しています。今のところ、主人の肩にぶら下って遊びの生活をしています。

下条和子 神戸市のはずれに引越ししまして、かわった所はなかなかなじみにくくて、仁川へ来たらほっとします。

多田幸子 高木さんの会社に勤めています。「わいふ」の封筒の宛名書きをしています。

司会 それから鹿児島島の平山博子さんが写真に手紙をそえて参加して下さっていますので御紹介します。

斉藤由美子 外国人に日本語を七回程教えています。今年の夏、三週間程アメリカに行つて来ましたが、行つてほんとうによかったと思つています。子供二人(小二と三才)は団地内の友人にあずけました。まわったところは、ハワイ、サンフランシスコ、シカゴ、南部と極く狭い地域だったんですけど、まず第一印象は国が荒れているという感じを受けました。そして大都会は特に人間が人間に関心を失っていると思ひました。日本の家族制度のことでよく質問を受けたんですけど、おじいさん、おばあさんと関係があるということは彼らに愛情があり関心があるという事だからうらやましいなんて言わそれからはほとんどの女性が働いて、れました。その仕事に一生懸命ぶつかつています。ウエイトレスなんかでもすごく自信を持っているんです。アメリカの場合女性が働いているのは、物価高で、働かないと普通の生活が出来ないんです。交通の便だつて車がないと生活できないですし、すべての生活費がものすごく高いんです。ですから中流家庭でも食生活はずいぶん簡単化されています。食事のふんいきはあるんで

すが三日間位主菜は同じものという具合です。まだ他にも色々ありますが、話が長くなりますのでこの位にして高木さんに「わいふ」の一年間の報告をしてもらいます。

高木 昨年暮に朝日新聞に「わいふ」のことが取り上げられまして、新しい会員が20人ほど増えました。それからこの一年間の「わいふ」をみた場合、やはり矢崎さんの「PTA改革の戦略・戦術」が芯になって貫いていると思うんです。新しい会員の方でも、そして学校は違っても、自分達のPTAで色々思いあたる事もあって興味をもつ方が多いようです。

石川 PTAは全くあの通りですわ。私達のところなんか団地と地元とが二派にわかれてしまつて、上の方はすべて地元で握られているんです。だから会員からいい意見が出て実行委員でおさえられてしまふんです。

後藤 前に新聞委員になったのですが、上の方から頭にくるようなことを言われて、新聞作るより上の方をなんとかしなければならぬと考へて、三人で計画を立ててやつたんです。そしたら次の年に手をまわされて首にされました。先生と校長が従業員と経営者の立場みたいですね。話のわかる先生が一人いらしたのですが、その先生は孤立していたようです。

上田 うちの学校の場合はそんな事全然感じないのですが、どうしてそういう事が判るのですか。

後藤 そういう雰囲気はなんとなく判るのと違いますか。

高木 「わいふ」が続いて来た原動力は何かと考へてみる事があります。千円会費をもらったらやれるとへうものでもないし、自分の書いた文が載つてうれいというナルシズムだけ

だったらこんなに長続きしなかつたと思うんです。やはりいまの生活に満足していない、自分自身の事や、社会的な事をもつとよく生きていきたいという気持だと思ふんです。

浜岡 今の幼稚園なんかで活動していますと、女が家庭を守つて、電化して出来た余暇をどうするか、本を読んだり趣味にその時間を使つたり教養を身につけるといふ規制観念があつて、その間で許されたことをする。わくを越えたり壁をぶち破るような発言をすると、たちまち拒否されます。その点「わいふ」はそういう規制がなくて、ここへ来るとはつとして、あらためて「わいふ」に刺激を与えられています。

高木 私はあるイミで「わいふ」は優等性的だと思ふんです。仕事をしたり、やりたい事をやつても、はみださないでうまく家庭と両立させている。今、ウーマンシップの運動があつて、ジャーナリズムにもなかなかさわがれています。この間テレビでウーマンシップについて、むのたけじ氏ともろさわようこさんが対談していました。むの氏は、ああいう言動によって女性が解放されるとは思わないとはつきり批判的でしたが、もろさわさんは、リップの会の人達の運動を積極的に認めていました。私はむの氏の信奉者ですが、その時は何故かもうさわさんの意見により共鳴したのです。「わいふ」とウーマンシップの運動とつながる面があるのか、つながるならどういふ点か、これからも考へてみたい問題です。

先ほど坂元さんが、最近の「わいふ」は井戸端会議的で……といわれたのですが、この間、ある同人誌に「わいふ」を送りましたら、なかなか楽しい雑誌ではあるけれど、論争がな

いと批判をうけました。「わいふ」はたしかにあまり大論争はありません。人に批判され、それに又反論するという事は、なかなかむずかしい事もあります。けれど、「わいふ」は、どんな小さな事柄でも事実を事実としてとらえる所から出発したものであります。性急に白黒をはっきりさせようとしな
いまあまあの所があると思うんです。私自身そういっただも
やもやとした雰囲気は嫌いではありませんが、そういうた所
が「わいふ」の長所でもあり、欠点でもあると思うんです。
坂元 シリーズのようなものでからしをきかせていっただも
と思いますけど。

浜岡 今の雑誌形式では堀り下げにくいのと違いますか。ある程度まではいつでも。

森 私はあんまり理屈っぽいものより、読んでほえましい文章が好きです。

高木 もうすぐ100号が出るんですけど、その記念に何か一つのテーマのものを集めて本を出したらどうかと思うんですけど。例えば「私の受けた教育」なんかだと、教育の追跡調査みたいでおもしろいと思うんですけど。教育の成果はすぐにはあらわれないであとから出てくる。過去に受けた教育の結果が現在の自分だと思っんです。だからそれによつて今の子供たちの受けている教育の結果も、ある程度予測できると思うんですけど。

上田 原稿もテーマを決め、年間プランをたて氏名を名ざして配分したらいいと思いますけど。

十日市 最初入られる時、読むだけとことわって入られる方も

いらつしやるので、なか／＼難しい問題ですけど、何とか考えてみます。

上田 頼まれたら嬉しいのじゃないかしら。

高木 投稿誌なので自主的に書いてもらうのが一番いいと思うんですけど、月によって原稿が多かったり少なかったりです。

石川 教育の事でききたいんですけど、母親が働く場合、子供との接触時間が短くなることと留守にしている時の問題があると思うんですけど。情緒不安定になると新聞に書いてあったので、私も外へ出たいけれど、ふみきれない。高木さんなかどうですか。

高木 大阪まで出ている時は確かに色々問題はありました。今は家と事務所が一緒なので、面倒はみれないうですけど、「お帰り」とは言つてやれるので気分的にずい分楽になりました。石川 今までほとんど手作りでしたので、ママの作ったものを着たいという。

高木 接触の時間が長いかわりか短いかだけが問題ではないと思うんですが。

鈴木 家庭にずっといた時とは時間的に短くなるから、その分なにか工夫がいろいろありますけど。それから手作りを何か別の形であらわすとか。

浜岡 愛情の表現方法で工夫がつかのちと違いますか。例えば夜ねる前に本を読んでやるとか。実際、私など家にも何もしてやっていないし。

後藤 子供の性格にもよると思います。子供をよく観察していたらどうしたらいいのか判ると思います。

笠原 ご主人と奥さんがうまくいっていたら、子供との問題は
おこらないと思うんですけどね。御主人が妻が外へ出るのに
反対だったら、子供もそれをまねをする。私なんか農家で育
ったんですけど、農家は全部共かせぎでした。今の子供は過
保護すぎるんじゃないですか。私は子供がないから具体的に
は判らないですけどね。

斉藤(る) 情緒不安定とか考える方がおかしいと思うんです
けど。子供がどうあらねばならないかという型はないと思っ
てます。

浜岡 情緒不安定になる、だから母親は家にいるべきだといわ
れるのは、新聞や放送局の意図もあると思うんですけど。
斉藤(る) マイペースでやればいいのと思いませんか。

浜岡 この間幼稚園で、元文部省に勤めていた佐藤某という人
の話があったんですが、母親は子供が帰る時は家において「お
帰らなさい」といってスキンスリップをしてやる。そういう事が
非行化をふせぐんだといわれる。こういう話を、来年から小
学校の家庭をねらって全国講演して歩いているというのは、
やっぱりおかしいと思うんですけど。

高木 でも子供を鍵っ子にしてほっておくというのは、やはり
問題があります。地域毎に学童保育や、児童会ができて母親
が安心して働けるようになるまでは、その子に合った方法で
かなり工夫や努力が要ると思うんです。

鈴木 情緒不安定なんて基準がないようなものだと思うんです。
「母と子」という本を読んできましたら、ちよっとかわった
子は全て情緒不安定という言葉でかたづけられていて、親も

そう言われるからそうだと思っている。でもそういう親の方
がおかしいとあって、なる程と思ったんですけど。

斉藤(由) 子供によって違うと思うんですけど、うちの子供
の場合ドライでして、こちらの条件を言えば、私が出かけて
いない場合、帰ってきたら手紙が書いてあって、〇〇ちゃん
のところに行きますなんて書いてありますけれど。

ある本に「子供は育てるのじゃなくて、育つんだ。親は手
かすだけ」と書いてあって、ほっとしました。やはり親とい
えども、自分を一番大切にしたいと思います。

後藤 他人の子供の事は参考になっても模倣は出来ないと思
います。外にでると子供の成績が落ちるというのは、小学校の
三年生ぐらいまでの成績は、子供と親の成績だといえますか
ら……。

正木和代 大変遅くなりどうもすみません。大阪の八尾から来
ました。途中で電車を乗りまちがえてしまいました。友人の
草刈さんからは是非来るようにというハガキをもらったんです。
それも高木さんからの指示だそうで、このチームワークの良
さに驚きました。「わいふ」が長続きする理由の一つはこの
チームワークの良さだと思いました。

皆さんから出た問題についてもつと話したかったんですが、
時間がなくて教育の問題だけで終わりました。皆様の話を聞きも
らすまいと一生懸命耳を傾けたりメモをした積りなんです、
だい分ぬけている事もあると思います。お許し下さい。

(この話は、草刈と十日市がメモをし、十日市がまとめました)



出席者(計20名)

(後列) (前列)

石川美智子 後藤美和子
河内山小夜子 鈴木芳子
坂元 礼子 斉藤るり子
森 かなえ 十日市睦子
河本 浩子 草刈土岐子
上田 吟子 杉本 輝子
定松 英子 笠原嵯枝子
多田 幸子 正木 和代
斉藤由美子 (下条和子)
浜岡哥代子 (高木由利子)

バザーの報告

最初品物のあつまりが悪いと宣伝しすぎた為か、後半たくさんの方より色々な物を出品していただき、例年よりも一万円余も増収となりました。重い荷物を運んでもって下さった方、遠方から高い送料を払って送って下さった皆様本当にありがとうございました。尚、売れ残りました品は、神戸の愛信学園に寄付する事にしました。0-18才までの身よりのない子供たちのいる施設で、古着なんかも喜んで下さると聞きましたので。

●バザー収入 二八、一一五円

●支出(会場費他) 三五〇円

●残高 二七、七六五円

●バザー出品者名(順不同)

斉藤るり子・平山博子・岡部節子・鈴木芳子・十日市睦子
後藤美和子・大坂はつ・正木和代・下条和子・高木由利子
平井きぬえ・山田昌子・草刈土岐子・松崎三子・多田幸子
千葉愛子・長谷川玲子・持丸啓子・高橋紀子・石川美智子
定松英子・森きぬ枝・河本浩子・斉藤由美子・浜岡哥代子
杉本輝子・坂元礼子・上田吟子・笠原嵯枝子・吉田てる子
倉田紀子・山本豊美

尚、左記の方々より寄付金をいただきました。

上田典子 千円 藤本巳代子 五百円

副島陽子 三百円 平田恵美子 五百円

森かなえ 五百円 印南千鶴子 五百円

森きぬ枝 五百円

※撮影者(高木)よりおわび

曇天でうす暗いのをすっかり忘れて、晴天の露光のまま写してしまい、まことに不鮮明なものが出来上ってしまいました。まずは、顔の輪かくなり、とくとごらん下さいませ。

編集後記

★ 八周年記念集会も無事盛大に開くことが出来、うれしく思っています。例年集まる常連に加えて、今年はじめての方としては、定松英子さん、坂元礼子さん、笠原嵯枝子さん、後藤美和子さん、河本浩子さん、河内山小夜子さん、杉本輝子さんをお迎えする事が出来ました。定松さんは、書かれた文章から、相当気のきつい方と想像していましたら、案に反して、もの静かでにこやかな方でした。坂元さんは内省的で、シンの強い方とおみうけしました。笠原さんはたしか私と同じ年の筈ですのにお子さんがいらつしやらないせいか、まだ学生気分のぬけきれないといった感じでした。後藤さんは、容姿端麗、頭脳明晰さしすめ、「ミセス・ワイフ」として推薦したいような……方でした。杉本さんはお体がお悪いそうで、思いなしかお顔色がすぐれませんでした。御自愛下さい。河内山さん、河本さんとは、これから誌上でもお目にかかりたいと思います。

★ バザーも予想以上の収益を上げることが出来、御協力下さった皆様方に心より御礼申し上げます。昨年バザーでは長男にレザーのプレザーを買って、外出着に重宝しましたし、今年には、紺のあたたかそうなジャンパーを買う事が出来、バザーでは本当に助かっています。準備は大変ですが、来年も、続けたいと思っています。でも遠方で出席出来ない方は、出品するばかりで、品物を買う事が出来ないのです、その点不公平ですね。

★ 来年三月に迎える「わいふ」100号を記念して「私の受けた教育」を一冊の本にまとめたと思っています。今までわいふに載ったものと、今から集まったもの全部収録したいと思いますので、まだお書きになっていない方は、ふるって御投稿下さい。

★ 今月の例会は

十一月二十三日（火）祭日

午後一時より高木宅で行ないます。多数御参加下さい。

（高木記）

表紙絵の言葉

斉藤るり子

サルビア（ブラジル原産）

「サルビア」ちよつといかず名前だけでは何度か耳にしていきましたが、十年程前、知人の家の庭でやつと実物の花を知りました。それ以来サルビアとその知人はいつも一緒に思い出されます。

何か美しいものと一緒に相手の心に残る様な自分でありたいと思っています。

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒666-01 兵庫県川西市向陽台2丁目6の36

十日市方「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

〒665 宝塚市仁川宮西町1の72

振替口座番号 神戸195515

印刷所 百合写植印刷有限公司

誌代 一部 百円

原稿〆切 毎月二十五日(以降翌月まわし)